

さんしゃ Zapping

Vol. 37 No. 1 (通巻 202 号)

2022 年 7 月

＜産社学会 ニュースレター＞

編集・発行：立命館大学産業社会学会（教員・院生委員会）

事務局：産業社会学部共同研究室

TEL (075) 465-8186

E-mail: s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp

<http://www.ritsumei.ac.jp/gsss/research/newsletter.html/>

〔 目 次 〕

＜新任紹介＞

着任のご挨拶	三木 裕和	p. 2
着任のご挨拶	宮尾 万理	p. 4

＜自著紹介＞

『有機体的広告論 -デジタル社会に向けてのもうひとつの広告思想-』	小泉 秀昭	p. 6
『パルクールと都市ートレイサーのエスノグラフィ』	住田 翔子	p. 9
『理科教育の新しいパラダイム』	野原 博人	p. 12

＜エッセイ＞

ロシア軍事侵攻と桃太郎	有賀 郁敏	p. 15
-------------	-------	-------

< 新任紹介 >

着任のご挨拶

み き ひろかず
三木 裕和



兵庫県の障害児学校教員として32年間勤務し、2011年から鳥取大学地域学部に勤めました。10年を経て、定年退職。1年間、年金生活を満喫した後、立命館大学産業社会学部にお世話になることになりました。どうぞ、よろしくお願いいたします。

障害児学校では、重症心身障害児の担任経験が長かったです。首のすわっていない、いわゆる「ねた

きり」と言われる子どもたちです。目と目でコミュニケーションできる子もいますが、最重度の子どもたちは、笑顔はまれでした。いろいろな教具を作って努力しましたが、心が通いあうことはむずかしく、私はこの教育に向いていないのかと嘆くこともありました。

しかし、姿勢を少し変えただけで呼吸が楽になり、ホッとした表情になる子どもを見ているうち、子どもの気持ちが少しずつわかるようになりました。この仕事をできるかもしれない、と思い始めるのに6年ほどかかりました。

自閉症の子、ダウン症の子、知的障害の子など、たくさん子どもたちと学校生活をともにしました。この仕事の難しさと喜びを学生たちに伝えられればと願いながら、教育研究活動を行っています。

鳥取大学では特別支援教育科目を教えていました。立命館でも同じような科目ですので、気持ちは楽です。

鳥取と立命館を比べてみて、学生の雰囲気はどう違うか。これが意外にも、鳥取の方がよく笑ってくれたように思います。授業で「ここ！」という笑わせどころで、よく笑ってくれました。立命の学生は、その点、笑いに厳しい。渋い。お笑いのメッカ、関西のせいでしょうか。なかなか笑ってくれません。しかし、よく考えてみると、鳥取の学生も「愛想笑い」だったような気がします。笑いと言学の両立は厳しい……。

立命館の学生にも「きょうだい児」がいます。話題を振ると「私の弟は障害児です」と語り、よく聞くと重症心身障害だったりします。学生本人に運動障害がある場合もあります。ある学生からは「放課後等デイサービスでアルバイトをしているんだけど、ともだちをいじめたり、しつこくからかったりするダウン症の子がいるんですけど、どうしたらいいのでしょうか」と泣きそうな表情で相談を受けたりもしました。

一見、クールな表情で授業を受けている学生も、心の中でいろんなことを考えている。悩んだり、困ったり、ためらったり、そして、足を踏み出したり。逡巡しながら前に進もうとする若い姿です。石からしたたり落ちる清水みたい。授

業で笑わせようと腐心している我が身を恥じる瞬間です。

「障害児教育における教育目標・教育評価」の研究を続けています。仲間の研究者、学校教員は関西が多いので、これから共同研究がやりやすいなあとと思っています。

「未来を信じ 未来に生きる。」末川博先生の碑文を拝見しながら、この大学で、もうひと仕事がんばろうと、思いを新たにしています。

着任のご挨拶

みやお まり
宮尾 万理



4 月に着任しました宮尾万理と申します。言語・国際教育分野の一員として、これから様々な英語科目を担当いたします。

生まれは滋賀県の湖東エリアです。猫のキャラクターで有名な彦根城のそばにある高校を卒業後、愛知県内の大学に進学しました。そこでは英語や英語圏の社会文化等を学びましたが、「大学 4 年間で

印象に残っていることは何ですか」と尋ねられれば、「管弦楽団での活動です」と即答してしまうような学生生活を送りました。しかし卒業後の進路を真剣に考えた時に、「もっと英語力を高めたい、日本の外を見てみたい」という気持ちが強かったので、アメリカの大学院に進学しました。院生として言語学研究を行う傍らで、所属学科の専門科目を教えたり、大学付属の語学学校で留学生（主に日本を含むアジア圏出身者、ごく稀にヨーロッパや中東出身者）に英語を教える機会に恵まれました。帰国後は、京都市内のいくつかの大学で英語関連科目を担当してきました。

研究の専門分野は言語学で、中でも心理言語学に興味を持っています。この分野が追求する目標に、「人間がことばを理解する過程のメカニズムを明らかにする」というものがあります。以前に行った研究の 1 つでは、Someone shot the

servant of the actress who was on the balcony（誰かがバルコニーにいた女優の召使いを撃った）という、この分野では有名な文の理解を扱いました。この文は曖昧（ambiguous）で、2通りの解釈ができることにお気づきでしょうか。1つは「女優の召使いがバルコニーにいた」というもので、もう1つは「女優がバルコニーにいた」というものです。ある研究者（Cuetos & Mitchell, 1988）がこれを英語の母語話者に見せたところ、前者よりも後者の解釈が好まれました。しかし、スペイン語の母語話者にスペイン語で書かれた同じ文を見せると、前者の解釈が好まれたそうです。文構造は同じなのに、言語間で解釈の好みが分かれるのは興味深く、多くの心理言語学者が理論的説明を試みました。

みなさんは上の日本語文で、どちらの解釈を好まれますか。先行研究でも、私が共同研究者で行った実験でも、日本語母語話者は前者の解釈を好みました。そこで、日本語を学習している韓国人に読んでもらったところ、ある実験では後者の解釈を好む傾向が見られました。韓国語と日本語の母語話者

はそれぞれの言語で前者の解釈を好むのに、なぜ韓国人日本語学習者は後者を好むのか。明確な答えは分かりませんでした。第二言語での文処理は作業記憶に負荷がかかるので、それを軽減させるストラテジーを使ったのではないかと推測しました。

もう1つの研究分野・テーマとして、大学英語教育でいかに思考力を育成できるかということにも取り組んでいます。高等学校の学習指導要領では思考力・判断力・表現力等の育成が掲げられていますが、過去2年間の大学入学共通テストの『英語』では、文章の概要・要点・必要な情報を把握する力を測るにとどまりました。一方で、海外の大学入学資格試験の多く（Aレベル、国際バカロレア等）は記述式で、高度な批判的思考力が求められます。グローバル社会において他国の人々と対等に議論できる日本人を輩出するには、大学英語教育がどうあるべきかを模索しています。

これから学部の教育・運営に貢献できるよう邁進いたします。何卒よろしくお願いいたします。

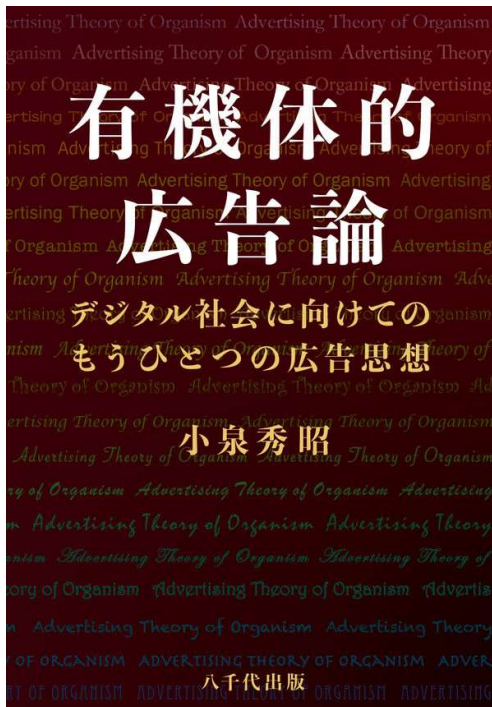
< 自著紹介 >

小泉秀昭（著）

『有機体的広告論

～デジタル社会に向けてのもうひとつの広告思想～』（八千代出版）

小泉 秀昭



本書を出版できたのも、一重に2021年度立命館大学産業社会学会の学術図書出版助成を頂いたおかげと考える。学会の会員の皆さま、産社共研の皆さまには心より感謝を申し上げたい。本著は私にとってはじめの単著である。退官を迎えるこの歳まで、単著を書くことができなかったことを恥ずかし

く思うが、単著を出す以上は納得のできるものを書きたいと考えていた。

この本で書かせて頂いた内容は、私が研究者として過ごしてきた約30年間で少しずつ学び考えてきたことである。30代前半にMBAと呼ばれるビジネス修士では学んだが、大学院の博士前期課程の門をくぐったのは30代後半である。その後40代前半で博士後期課程に進学したが、実務を行いながらの学びで本学に着任をする48歳まで実務との兼務の中で少しずつ研究を進めてきた。大学院に進学するか迷っていた頃、恩師に「小泉君には、研究者と実務家の懸け橋になるような研究をして欲しい」と言われたことを今でも思い出す。この本『有機体的広告論～デジタル社会に向けてのもうひとつの広告思想』も、そのような思いを持ち書き上げた。

広告業務に携わっていた20数年、特に20代の頃は、思想や自分自身

の考えなどなく、ひたすら目の前の仕事をこなしていた。いつの頃からそのような仕事の仕方に疑問を持つ自分がいた。また近年広告のデジタル化が進み、広告メディアの増加、広告価格の下落に伴い、広告担当者は業務の増加とスピード化に直面している。増加する業務を減らすため、また効果を高めるために、広告業務の自動化が進み、ある意味広告会社の担当者はパソコンのボタンを押すだけの仕事になっている場面も見受けられる。そのような状況を打破するため、また人々から嫌われ者と思われがちな広告の価値を高めるため、新たな広告の考え方、広告思想が必要であると考えた。そのキーワードは「創造」である。

恩師の勧めもあり、「プラグマティズム」やアーノルド・ホワイトヘッドの「有機体の哲学」に出会った。それらを少しずつ読み進める中で、これらの思想を基に、広告の新しい考え方を組み立ててみたいと考えるようになった。彼らの思想の根幹にあるのは「創造」である。「プラグマティズム」の考え方ではないが、創造的な広告活動を行うという目的をどう達成するかという視点で論を展開している。また、創造的な広告活動を行うために、広告主と広告会社の取引の問題につ

いて避けて通れないと考え、そのための章をかなり入念に執筆した。この章のベースにあるのは産業組織論のメアリー・パーカー・フォレットの考え方である。広告取引については、20 数年前から公益社団法人日本アドバタイザーズ協会と実態調査を繰り返し行った。その調査内容を踏まえての私論である。

章立てとして、1 章はホワイトヘッドの「有機体の哲学」の思想をどう広告業務に活かすのかという整理を行った。2 章では、プラグマティズムの中で特に初期の代表的な思想家であるウィリアム・ジェイムズとチャールズ・サンダース・パーズを取り上げ、特にパーズの「直観の否定」や「アブダクション」から、広告戦略の立案に関する視座や、消費者インサイトへの展開に関するヒントを得た。3 章では、フォレットの「対立」の概念を用い、広告取引を念頭に検討してみた。

4 章は、それらをまとめる意味もあり、これまで比較的広告業界で用いられてきた「ロジカル思考」「デザイン思考」「アート思考」の整理及び課題を指摘しながら、筆者の「有機体的思考」を明らかにした。

2 部の 5 章からは各論であり、実際の広告活動に役立つと思われる内容を述べている。5 章の「有機体

「広告戦略開発」では、マーケティング分野で王道と考えられるコトラーの考え方を取り上げ、それらの分析を行う意味を検討した。6章では、広告活動の大きな柱のひとつである広告表現の整理を、「広告の目的」「広告コンセプト」「広告表現アイデア」の流れで整理を行っている。また、オリジナルの整理となる「広告表現の4分類表」を提示することができた。

7章と8章は消費者インサイトについて述べている。最初にインサイト力を身につけるための方法を、リサ・フォーティーニ＝キャンベルの『Hitting The Sweet Spots』を参考に述べた。その後、石井淳蔵と野中郁次郎・紺野登の考え方と比較しながら、独自のヒューマンインサイトの考え方を述べている。

9章から12章は主にメディアプランニングについて述べている。特に10章では、日本におけるメディアプランニングの歴史的な流れを概観しつつ、その主要な概念を整理した。また質的なメディアプランニングの立案に有用と思われる「The Day in The Life」「共視性」といった方法・概念についても述べている。

3部の13章から16章は広告取引についてである。我が国ではあまり多く使われていない欧米の手

法の解説を踏まえ、過去20年以上の実態調査・質的調査の知見を踏まえ、我が国の広告取引の独自性、そして今後求められる広告取引の姿を提示した。そこでの基になる考えは3章で取り上げたフォレットの考え方である。

補講として、広告教育論の章をあえて加えている。それは、これからの広告をより良いものとするためには、教育は欠かせないものであると考えたからである。ここでの記述は、ホワイトヘッドの教育論と筆者の約20年のゼミナールでの指導から得た知見を基にしている。

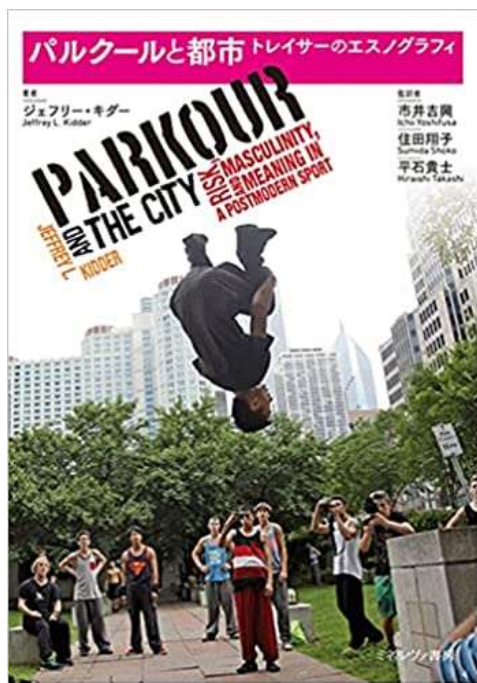
このように、ある意味総花的で、多様な内容を本著は含んでいる。もちろん広告は多様な側面を持つものであり、この考え方に当てはまらないものもあるかもしれない。しかし、ここで取り上げたことが、今後の創造的な広告活動を行うためのもうひとつの考え方として、広告界を大きく発展させてくれるであろう若者のヒントとなればと考えた。ホワイトヘッドの考えではないが、退官を迎えた筆者であるが、その学びはプロセスの途中であると考えている。今後も多くのものを吸収しつつ前に進んでいきたい。

ジェフリー・キダー著/市井吉興・住田翔子・平石貴士 監訳

『パルクールと都市ートレイサーのエスノグラフィ』

(ミネルヴァ書房)

住田 翔子



近年ますます注目されているライフスタイルスポーツのひとつで、都市空間を走り、跳び、登るのがパルクールというスポーツである。そしてその実践者であるトレーサーに密着しながら、彼らの無謀とも見えるパルクール実践が意味に満ちあふれた社会的な世界として現れる様子を活写したのが、当時

ノーザンイリノイ大学社会学部准教授であったジェフリー・キダー氏による Parkour and the City: Risk, Masculinity and Meaning in a Postmodern Sport (2015) であり、本書はその邦訳である。なお本書を刊行するにあたり、2021 年度立命館大学産業社会学会学術図書出版助成をいただいた。学会および皆様に、深く謝意を表したい。

本書は、序章から終章までの原著に沿った 6 章に、原著者キダー氏による日本語版への序文、ならびに訳者による解題—パルクール研究における本書の先駆性と課題—を加えた構成となっている。

序章では、パルクールという鍛錬の文化を社会学的観点から考察する意義について示されている。第 1 章では、パルクールの起源から世界的な発展、そして現代の制度化に至るまでの歴史を包括的に概観される。なかでも第 1 章では、パルクールが世界的にメインストリームの文化や商品として成立し

ていく「ビジネスモデル」への注目が特筆に値する。第2章では、アパデュライの「グローバル・エスノスケープ」という概念を用いて、パルクールに関するトレイサーの認識枠組みが、どのように「オンライン」で生産され、変更され、消費されるかが分析されている。第3章では、トレイサーのジェンダー・アイデンティティの形成過程が分析対象となり、男性トレイサーも女性トレイサーも、都市を冒険しリスクを冒すことを通じて、パルクールのスキルを開発することが提示される。そしてこのプロセスにおける男性と女性とで異なるアプローチの存在を明らかにしている。第4章では、リスクと安全のバランスをとる「ヘッジワーク」という概念に焦点を当て、リスクに対するトレイサーの合理化された説明や動機/モチベーションと、ポストモダン文化の新自由主義的なレトリックやポストモダンの経済的言説としての新自由主義とが「共鳴」していることが示される。終章では、このようなポストモダンなスポーツとしてのパルクールが、都市空間を転用することを通じて創造的に生きることにかかわる、ミシェル・ド・セルトーの言うところの「戦術」であることが考察されて

いる。

パルクールは、1980年代にフランスのパリ郊外のシテ（第二次世界大戦以降に建設された集合住宅団地）に住まう若者たちの「遊び」を基盤とし、都市にあるコンクリートや鉄などの硬い構造物を設計者の意図から離れて自由に移動する身体運動技術を開発・鍛錬していく運動文化である。2000年代以降、フランスのアクション映画を通じて世界に広がり、英米、北欧を中心に実践者を持つようになった。近年は、2017年に国際体操連盟が正式に体操種目に認め、オリンピックでの正式種目化を進める動きがあるなど、競技化、スポーツ化も進展している。

日本においても、2001年にリュック・ベッソン監督による映画『ヤマカシ』の公開、その後の各種TVCM（たとえば、ナイキ、TOYOTA）でのトレイサーのパフォーマンスに影響を受けた若者たちが、映像を頼りに、パルクールの実践を開始する。この当時、現在のようにSNS等が発達していなかったが、オンライン上の掲示板での情報交換、ジャム（トレイサー同士の練習会）の参加募集が行われていた。そして2014年、日本パルクール協会が設立され、その後も様々

な団体が誕生している。

また団体設立とともに、そのもとでパルクールジムが運営され、講習会が活発に開催されている。加えて、パルクールは地域振興のコンテンツに採用され、金沢市において「忍者パルクール」というイベントが開催されてもいる。パルクールのパフォーマンスが日本の忍者を連想させ、それと結びつけるという試みは興味深い。さらに、日本で人気のある **SASUKE** というTV番組にパルクールのトレーサーが出場し、そのパフォーマンスがパルクールへの認知度を高めることに貢献している。

このように日本においてもパルクール愛好者が増えてきている一方で、アカデミズムにおける関心は依然一部に留まっているのが現状である。パルクールが世界的にメインストリームの文化や商品として成立していくプロセスに対す

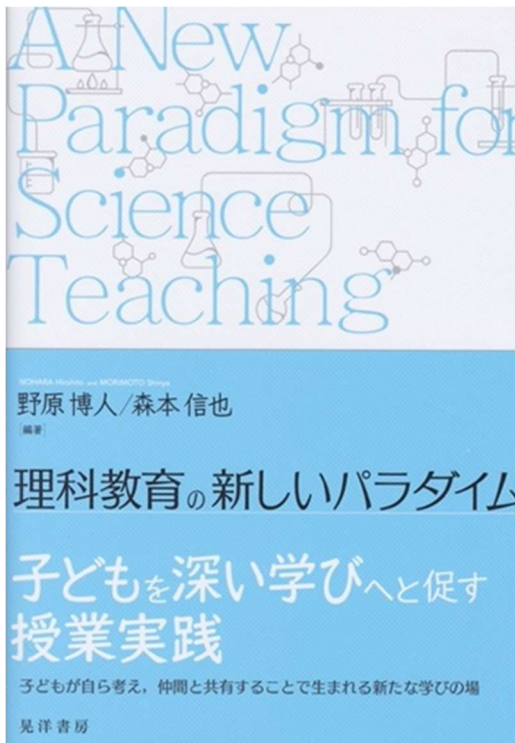
るキダー氏の分析は、日本におけるパルクールの受容と発展を検討するうえで、非常に示唆的である。また、パルクールが、それが実践されるローカルなコンテキストとソーシャルメディアの力を借り、ローカルなコンテキストを超えてグローバルな広がりを持ちながら、実践者のアイデンティティを問い直すという「グローバルな営み」である点は、スポーツ研究のみならず、多様なモビリティの形態を検討するうえでも、注目すべき点である。それゆえに、本書の出版は、日本のスポーツ社会学はもちろんのこと、文化社会学や都市社会学においても新たな研究の指針を提示することになると期待している。

なお、本年度中にキダー氏を迎えての出版記念ワークショップを開催予定であり、ご関心ある方にはぜひ足を運んでいただければ幸いである。

野原博人・森本信也（著）

『理科教育の新しいパラダイム』（晃洋書房）

野原 博人



本書の刊行にあたっては、2021年度産業社会学会学術図書出版助成をいただきました。学会の関係各位および会員の皆様に深く感謝の意を表します。

本書は、編著者自身や共同研究者による理科授業の実践を事例として、理論と実践の往還、融合を念

頭においた授業分析を通して、これからの理科教育の方向性を提案することを最大の主眼としています。

現代の理科教育では、PISA、TIMMS、全国学力・学習状況調査等において指摘されているように、子どもが自ら自然事象についての考えや知識を作り出していく学習の実現が求められています。子どもが理科授業で自分なりの納得のいく考えや知識を作り出し、子どもに学習の楽しさを感じさせることです。こうした理科授業の実現には、子どもに寄り添う教師の姿勢が切要です。本文で示される「アセスメント」は、ラテン語由来による *sit beside* が語源であり、「側に寄り添う」という意味を持ちます。本書は、教師が子どもに寄り添い、子どもが考えや知識を作り出していく理科授業を核にして展開されます。これらの理科授業について、理科教育学に関わる学習論、方法論、評価論、授業論に基づく分析を

し、これからの理科授業デザインのあり方について論じています。

また、本書では、章ごとに著者らによる対談を掲載しています。この対談は、これまで共に理科授業研究に携わってきた著者らによる「経験」についての「語り」といえます。対談内容を読者が読み解きながら、これからの理科授業のあり方を模索したり読者自身の実践を振り返ったり、様々な課題について深く考える機会の提供に試みました。

本書の構成は、「第Ⅰ部 現代の理科教育で捉える学力」、「第Ⅱ部 理科授業における子どもの考えの可視化とその評価」、「第Ⅲ部 深い学びを促す理科授業のデザイン」の三部で構成されています。

「第Ⅰ部 現代の理科教育で捉える学力」では、国内・国外における学力調査等の分析に基づき、認知的スキル・非認知的スキルを吟味し、理科教育における教授・学習論について論じています。

「第Ⅱ部 理科授業における子どもの考えの可視化とその評価」では、第Ⅰ部で明らかになった理科教育における課題の改善を図るための方法論、評価論に基づく理科授業デザインのあり方について論じています。

「第Ⅲ部 深い学びを促す理科授業のデザイン」では、第Ⅰ部、第Ⅱ部の議論を踏まえて、学習環境の整備や対話的な学習の実現に関する授業論を示し、深い学びの実現に向けた理科授業デザインについて議論しています。

本書は、理科授業における子どもの学習可能性の発見とその指導方法の分析に試みました。この分析を通して、以下に示すように、新しい学習者像とこれを育むための指導方法に関する視点を生み出しました。

1点目は、子どもの思考とその表現方法についてです。例えば、物が溶けて見えなくなってもそこに粒として存在しているというイメージを伴う理解は、将来の原子論的な考えへと導く可能性を秘めています。イメージをはじめとする科学概念の多様な要素を交えた理解は、先の学習の重要な素地となります。

2点目は、思考の表現方法の自由度がもたらす学力についてです。思考の表現の自由度を拡大することは、自分なりの論理を組み立て、自信をもって粘り強く考えようとする態度を育みます。認知的スキルと非認知的スキルが表裏一体となって機能することが、子どもが

自律的に考えを深め、発展させる機会をもたらします。

3点目は、1点目、2点目で指摘した活動を維持し、促進するための学習環境の設定についてです。有用な学習は子ども一人では成立しません。周囲にヴィゴツキーの言う「有能な仲間」がいるとき、学習はより豊かになります。自分の学習にとって必要な情報を入手できるからです。このことを子どもに自覚させ、その下で学習する有用性を実感させることが必要です。例えば、溶けることについての議論では、粒論で考える子ども、まだ粒論では考えていない子ども、皆同じようにことばを使います。同じことばで話し合いをしてもその内実は異なっています。教師によりこうしたことが常に露わにされるとき、ことば、すなわち科学概念の修正や拡大の必要性を子どもは徐々に自覚していくのです。これは協働的な学習をデザインする意味であり、拡張による学習として具現化されます。科学概念の意味を協働で深めるとき、はじめ使い方が曖昧だった概念が教室という社会で認知されていきます。科学

概念がバフチンの言う「社会的言語」として精緻化されつつ教室で受け入れられていくのです。

4点目は、1～3の視点を統括する機能の充実です。学習可能性の分析、すなわち、子ども個々の考えの良さの発掘、それは教師と子どもによりなされなければなりません。教師のアセスメント・リテラシーによる、子どもの表現の面白さ、ユニークさの発掘が基礎となります。多様な子どもの考えや表現を教師による価値づけがなされるとき、教室で「沈黙のパートナー」としての子ども達は目覚め、アクティープな学習者へと変貌していくのです。アクティープな学習者の育成は、現代の重要な教育課題です。課題解決の端緒はここから開かれます。上述した4つの視点を結びつける授業において実現されるのです。

本書がこれからの理科教育において何をもたらすのか、実のところ真新しいものを提案するに至っていないかもしれませんが、「子ども」を主語とした理科授業デザインの発展に少しでも貢献できることを願っています。

<エッセイ>

ロシア軍事侵攻と桃太郎

有賀 郁敏

学生への質問

4月のある日、私は体育会に所属する法学部生に練習の後、次のような質問をしてみた。

有賀「桃太郎の話を知ってる？」

学生「はい。おじいさんとおばあさんに育てられた桃太郎が、犬と猿と雉にきびだんごをあげて鬼ヶ島に鬼退治いく。桃太郎らは鬼退治をして無事に戻ってくる、かな」

有賀「そうだよ。ところで、桃太郎の鬼退治を正当化する法的根拠は何か？」

学生「？」（質問の趣旨が分からず）

有賀「桃太郎らの鬼退治が法的にどうして許されるのかな？」

学生「それは、鬼が村人を襲って村から財産を奪い取ったものを桃太郎が取り戻したのだから、よいのでは」

有賀「でも、鬼が村で暴力の限りを尽くして村人の財産を乱暴に奪

ったことが物語のどこに書かれているの？」

学生「？」、他の学生「それは、読む人が想像するんです」

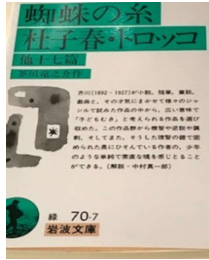
有賀「想像ということであれば、桃太郎が鬼ヶ島に犬猿雉を引き連れて鬼を虐殺し、財産を略奪して村に戻ってきたというストーリーだってありうるよね。しかも、鬼ヶ島での対立は話し合いではなく力＝暴力だったわけで、それは許さるのだろうか？」

学生「????」

有賀「実は、この話はぼくのオリジナルではなく（幾分、ぼくの考えを付与しているけど）、芥川龍之介が「桃太郎」という作品の中で書いている。アクターは一緒でも物語の主題を反転させて、まったく別のストーリーにしている面白いね。ちなみに同じ手法で芥川は「猿蟹合戦」も書いているよ」

学生「面白そうですね」

有賀「岩波文庫で読めるよ」



芥川は「桃太郎」で次のように書いている（写真：芥川「桃太郎」『蜘蛛の糸・杜子春・トロッコ』岩波文庫）。あ

る個所を引用しておこう。

「桃太郎はこういう罪のない鬼に建国以来の恐ろしさを与えた。鬼は金棒を忘れたなり、「人間が来たぞ」と叫びながら、亭々と聳えた椰子の間を右往左往に逃げ惑った。「進め！進め！鬼という鬼は見つけ次第、一匹も残らず殺してしまえ！」桃太郎は桃の旗を手に、日の丸の扇を打ち振り、犬猿雉の三匹に号令した。・・・飢えた動物ほど、忠勇無双の兵卒の資格を具えているものはないはずである。彼らは皆あしらうように、逃げまわる鬼を追いまわした。犬は唯一噛み鬼の若者を噛み殺した。雉も鋭い嘴に鬼の子供を突き殺した。猿も・・・鬼の娘を絞め殺す前に、必ず凌辱を恣にした・・・」。（芥川、282 頁）

歌にもなって人々の心に刻み込まれているよき桃太郎は残虐の限りを尽くすヒーロー役に変身している。こうした桃太郎像は芥川のみならず他の小説家や文人らによっ

ても描かれているのだが、ロシア軍によるウクライナでの蛮行とも重なってくる。

鳥越『桃太郎の運命』から

もう 40 年以上も前になるが、一般教育科目（今の教養教育科目）「児童文学論」の講義で、私は様々な「桃太郎」と出会った。授業担当者は鳥越信教授、鳥越先生は学生に大変人気があり、確かこの科目は抽選で登録したと思うが大講義室はいつも満席、今でも内容や先生の声を鮮明に思い出すことができるほど秀逸した講義だった（成績は「優」）。

ちなみに鳥越先生の著作の中に『桃太郎の運命』（NHK ブックス、後に改定されてミネルヴァ書房より刊行）があり、お伽話ナンバーワンの「桃太郎」が時代の変奏において様変わりしていることが論じられている。この中で桃太郎は運命のままに翻弄され、変幻自在に変身するのである。もちろん童心をゆさぶる定番の桃太郎もあれば、芥川のようにいわばヒーロー役になって平穩に暮らしている鬼の暮らしを滅茶苦茶にする桃太郎、はたまた社会の産業化にともない、力をつけつつあった資本家に対する

階級闘争的な視点からの桃太郎も



表紙写真は「桃太郎征伐」に登場する人形

いて興味は尽きない（写真：黒坂平八「桃太郎征伐」、鳥越、96 頁）。ここでは小稿との関係で 15 年戦争末期の 1944 年、雑誌「少国民文化」に掲載された百田宗治の少年詩「桃太郎出陣」の一部を引用しておこう。総力戦体制下、皇国の子たる桃太郎に投影された当時の日本の姿を垣間みることができるだろう（写真：「桃太郎の海鷲」、鳥越、131 頁）。



「・・・日本ぢゆうに桃太郎が産まれる。つよい桜色の桃太郎が産まれる。日本ぢゆう桃太郎が出陣する。一人残らず出陣する。工場に向かって出陣する。学校に向かって出陣する。戦場に向かって出陣する。海と、空へ 出陣する・・・」（鳥越、163 頁）

ちなみに、歴史学者の鹿野政直は朝日新聞主催、文部省後援で 1930 年に始まった日本一の健康優良児、いわゆる「桃太郎さがし」に関する論説を書いている（鹿野『健康観にみる近代』朝日選書、2001 年）。健康優良児は優れた兵士のロールモデルであり、この「体力の時代」を象徴するメタファーとして桃太郎は位置づけられたのである。

ところが敗戦後の作品では、一変して戦時中の戦意高揚ぶりを自己批判して日本一を捨て去る桃太郎が登場する。奈街三郎の学校劇「ただの桃太郎」（1950 年）はその中の一つである。一部を引用しておこう。

「桃太郎 戦争でぼくは、刀と扇もなくしてしまった。だけど、日本一の桃太郎という旗印だけは、だいじに持って帰った。

いぬ それをまたどうして？

桃太郎 いや、かえってみたら、日本一なんて、とんでもないうぬぼれさ。日本一というのに、ろくなものはありやしない。ぼくだって、同じことさ。だから、ぼくはきょうから、日本一の桃太郎じゃない。ただの桃太郎だよ。」（鳥越、175 頁）

このような変身ぶりに驚くほか

ないが、それだけ桃太郎は多様な顔を持っているということなのだろう。

勸善懲惡の落とし穴

ヒーローとしての桃太郎の生き様は芥川のユーモアと思慮深さを表しているが、それとは逆に「正義の味方」として描かれる桃太郎は勸善懲惡ゆえにナショナルな視点から権力者にとって恰好のモチーフとなる。ちなみに大多数のロシア国民からするとプーチンやロシア軍が桃太郎ということか。このカール・シュミットを彷彿させる敵と味方あるいは白黒鮮明な事態に直面すると、人々は救世主としての桃太郎の出現を希求する。「やっちまえ。たたきのめせ」と。

ウクライナ情勢、なかんずく子



ども等の罪もない市民の殺害に遭遇してしまうと私は平常心でいることが難しい(写真:キエウの瓦礫から助けられる老人、『朝日新聞2022年3月16日付夕刊』)。たとえ

ば、報道番組等でウクライナ軍がドローンを使ってロシア軍戦車などを爆破したとか、あるいは旗艦「モスクワ」が撃沈されたシーンにでくわせば安堵する衝動を抑えきれない翻弄された自分がいる。無辜の子どもやお年寄りを容赦なく殺戮しているロシア軍の蛮行から、われわれはウクライナ軍の戦果に快哉を叫んでいないだろうか。連日、ウクライナの戦況が地図上で色分けされ、欧米から戦闘機、戦車、最新兵器がウクライナへ提供されるのを聞いて、これでロシア軍を効果的に攻撃できると期待していないだろうか。

しかし、少し冷静になって考えてみれば分かることだが、ロシア軍兵士も人間であり親も家族もいる。ウクライナの人々と同じように殺されてよい存在ではない。ロシアには「兵士の母の会」なるものがあり、母親たちは息子の安否確認、遺体の受け取りをロシア政府に要請しているという。戦争で死ぬために子どもを産んだのではないことはウクライナ、ロシアの母にとって違いなどない。もちろん、ウクライナ危機をもらした責任はロシアにあり、国連憲章、国際人道法違反の軍事侵攻を仕掛けたのはロシア軍であり、それを指導して

いるのはプーチンである。批判されるべきはロシアの側にある。

上述の『桃太郎の運命』で悪役の桃太郎とともに登場する犬猿雉の素性も独特である。要するに、それぞれが貧しいことである。たとえば、犬は腹をすかせた野良犬として登場する。ロシア軍の中に傭兵がいるという。プーチンシンパのチェチェンのガディロフ特殊部隊は兵士と市民の区別などお構いなしに、手あたり次第に惨殺を繰り返す「勇敢さ」が売りのようだ。あるいはアラブの独裁者のアサド政権の下にあるシリア兵も傭兵として雇われていると伝えられている。情報戦を考慮しなくてはならないが、これらの国・地域の傭兵の多くは貧しさから人殺し集団と化してウクライナ国民を殺すことで「きびだんご」＝金を得ていたとしたら、何とおぞましい光景だろうか。

桃太郎がめざす世界

マリオポリの製鉄所の地下壕に避難しているといわれている子どもらの動画が何度も流れるが（写真：マリウポリの即席の防空壕に座る女の子、『朝日新聞』）2022年3月16日付夕刊）、今何がしたいと



いう質問に対して、「太陽がみたい、美味しいものが食べたい、外に出たら何を食べるか決め

ているの」と返答する女の子の屈託のない笑顔が切ない。それゆえ、ロシア軍の蛮行を前に「力には力を（軍事には軍事を）」と軍事攻撃を礼賛し、けしかけるような風潮が社会にまん延することを危惧する。プーチンを厳しく断罪するバイデンアメリカ大統領は、ウクライナ軍への最新兵器の提供には熱心でも外交面で効果をあげているとはいえない。日本政府にしても国連憲章、国際法そして何よりも日本国憲法から外交努力によってロシアを包囲しようとしているように私にはみえない。唯一の戦争被爆国の政府として非核三原則の遵守そして核兵器禁止条約による核兵器廃絶の先導役となっているのだろうか。甚だ疑問である。ウクライナ危機を梃子に火事場泥棒ごとく、数多の尊い犠牲の上で築かれた日本社会の礎を壊し、軍事大国化にひた走ろうとする趨勢に加担すべきではない。

鳥越は先に紹介した著作の最後を、次のような文章で締めくくっている。「桃太郎の流転の運命は、決して終止符をうったわけではない。私たちは、桃太郎が辿った運命を教訓にして、今後ふたたびこの愛すべき民話の主人公が、その意に反した変容を強いられないように、しっかりと見守っていかなければならない」。

戦争によって失ってよい命などどこにもない。国や地域によって、そこで生活する人々の命の差などない。政府の特別専用機はウクライナのように、ミャンマーやアフガニスタン等に対しても「飛べる」はずである。政府はウクライナからの避難民のように、生活保護を求める国内の人々に手を指し伸ばすことができるだろう。田辺友三郎作曲の「ももたろう」では「きはやさして ちからもち」なのが桃太郎である。鳥越が「愛すべき民話の主人公」と語った心意までは分からないが、しかし、好戦的な言動を好み人々を戦場に誘いながら、自らはそのような危険な場所に絶対に足を踏み入れようとしない無責任な為政者や評論家でないことだけは確かであろう。

ウクライナの戦況は厳しさを増している。しかも、長期戦を覚悟し

なくてはならないという英米シンクタンクの予測もなされている。先行きは明るくはない。

しかし、このような惨状にもかかわらず、世界社会はロシアの軍事侵攻をとめるべく様々な運動を続けており、それぞれの運動の規模は大小様々だが、そこには平和な社会を復元しなくてはならないという共通の願いと連帯がある。私は、そうした地道ではあるけれど道理に照らして輝く運動にかけてみたい（写真：ベルリンの平和を求める 2 月 27 日の運動、『朝日新聞』2022 年 3 月 1 日付）。



桃太郎には平和な世界を好み弱者に

優しく、そして理不尽を許さない力強さが似合うと、私は思っている。（2022 年 4 月 28 日）

（付記）

本稿執筆後、倉持よつば『桃太郎は盗人なのか？—「桃太郎」から考える鬼の正体』（新日本出版社）を読んだ。本稿のモチーフとは異なるが、ここに紹介したい。